

—編集後記—

土壌の物理性の編集幹事として、原稿が投稿されてきたとき最初に頭に浮かぶのは、査読が長引かなければ良いなあ、ということである。最近、査読者の皆さんの協力のおかげで、査読期限は概ね守られているが、著者の修正に時間がかかる場合がたまに見受けられる。原稿の修正が遅れる主な原因は著者が多忙なためだろうが、査読者の指摘事項が多かったり、漠然としていたりして、修正に時間がかかってしまう場合もあるかもしれないと思う。学会発表の場合、コメントをする人の顔を見ながら議論できるので、厳しいことを言われても、それが本当に発表者の研究を良くしようと思って言ってくれていることが伝わるだろう。もし誤解があれば、休憩時間にもゆっくりと話し合うことができる。一方、査読は書面だけのやりとりのため、書いてあること以外のことは伝わらない。また、土壌の物理性を含む多くの雑誌では査読者が匿名のため、誰が査読者なのか著者にはわからない。その上、査読者のコメントは論文の掲載の是非を左右する大きな力をもっているのだから、著者にとって査読者は、人通りの少ない薄暗い街角でぱったり出くわした覆面レスラーのようなものだろう。そのような状況で覆面レスラーから空手チョップのごとき否定的な指摘を受けたら、著者は萎縮し、コメントを必要以上に重く受け止め、なかなか修正が進まない、ということもあるかもしれないと思う。査読をするためには、その分野について十分な知識があることが必要なことは言うまでもない。これに加え、査読者として守るべき基本的なルールがある。土壌の物理性でも、投稿規定や執筆要領と共

に「閲読の手引き」として掲載されている。これらのことが適切に守られれば、ほとんどの場合、査読はスムーズに進むだろう。しかし、これらの条件が満たされれば良い査読ができるかという、必ずしもそうではないように思う。体裁が整っていない論文や科学的に信憑性の低い論文が掲載されないようにする、あるいは、わかりにくい論文を読みやすくなるように指摘することは、読者にとってとても大切なことである。これを踏まえた上で、本当に良い査読をするためには、査読者が著者の立場に立って考えてみることも大切ではないかと思う。ほとんどの著者にとって、論文は子供のようなものである。査読者や編集委員の努力により論文が良くなったことを実感できれば、著者は感謝し、その雑誌にまた投稿したいと思うだろう。反対に、不当な評価を受けていると感じたら、その雑誌には二度と投稿したくなるかもしれない。そう考えると、学会誌を良くするためには、良い査読者を選定する、あるいは良い査読者を育てることが、長い目でみるととても大切なことのように思える。一つの論文が投稿されてから印刷されるまでのプロセスは、著者と査読者、編集委員の共同作業である。これらの関係が良好であれば、論文は良くなるだろう。編集委員はともかく、査読者は顔が見えない分だけ、著者と査読者が良好な関係を築くことは楽ではないかもしれない。しかし、このような関係がより多くの原稿で築かれるなら、土壌の物理性はもっと良い雑誌になるのではないかと期待している。

岩田幸良（編集幹事）

土壌物理学会

事務局構成	会 長	波多野 隆介	(北海道大学)
	副 会 長	志賀 弘行	((地独) 北海道立総合研究機構)
	庶務幹事	柏木 淳一	(北海道大学)
	会計幹事	倉持 寛太	(北海道大学)
	編集幹事	岩田 幸良	((独) 農業・食品産業技術総合研究機構)
	会計監査	井上 京	(北海道大学)
		中村 和正	((独) 土木研究所)
		中辻 敏朗	((地独) 北海道立総合研究機構)
		飯山 一平	(宇都宮大学)
		木村園子 ドロテア	(東京農工大学)
編集委員会	委 員 長	古賀 伸久	((独) 農業・食品産業技術総合研究機構)
	委 員	竹内 晴信	((地独) 北海道立総合研究機構)
		永田 修	((独) 農業・食品産業技術総合研究機構)
		丹羽 勝久	((株) ズコーシャ)
		花山 奨	(山形大学)
		早川 敦	(秋田県立大学)
		笹木 伸彦	((地独) 北海道立総合研究機構)
		宮本 輝仁	((独) 農業・食品産業技術総合研究機構)
		森 昭憲	((独) 農業・食品産業技術総合研究機構)
		山本 忠男	(北海道大学)
		渡辺 晋生	(三重大学)